



女性室広報誌

# あいあう

2002・3 第11号

<寄稿>

解放のころ 随筆家 岡部伊都子さん

<座談会>

男女両性で形づくる教団にむけて

一本廟奉仕・教師修練の現場から(上)ー

<教区のうごき>

久留米教区

# 解放のころ

岡部伊都子

2

お互いに、ふしぎな力で人という形に生まれてきました。なぜか「男女」とわかれた二つの性のどちらかになっただけ……。

真宗系の女学校に通学していた一九三七年七月、日中戦争が始まりました。朝礼で毎朝、恩徳讃を唱えていた全校生徒が、校長先生の指示で氏神とされている神社に「戦勝祈願」のため何組にもわけられてお詣りすることになりました。

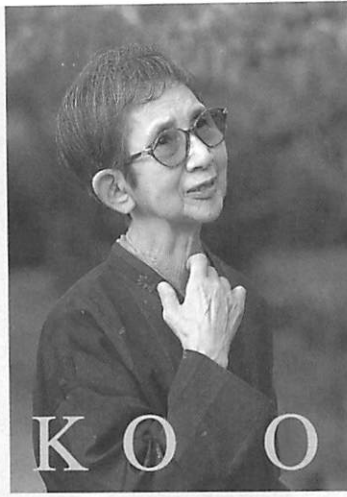
思春期の女子、もう月経の始まった人もいます。皆と一緒に詣りしても、引率の先生が「月ものもんのある人は鳥居をくぐるな。鳥居の前で待っていなさい」と言われました。友だちはお詣りするのに、はいれないで待つ友人……。

私はその時から「教育や、宗教を超えて、自分の心に忠実に生きたい」と思ったような気がします。

「人間て何やろ」、「女て何やろ」。

政治的にも家庭的にも社会的にもきびしい差別意識があつて、もちろん女性に投票権はありませんでした。家は家父長制。父は母に対して「女のくせに」「女だてらに」「女はきたない」「女なんて人間やあらへん」と、事毎に難癖をつけて威張っていました。その母を抱き、母以外の女性たちと次々に関係をもっていた父。私の血のなかに、このあわれな父がいます。「女はきたない」とか「人間やない」なんて女性蔑視するけれど、それは「血盆經」その他、月のざわりとされてきた経血を不浄視する男の偏見。どんなに立派な学者、宗教者、芸術家、労働者、先生方だって、みんな女性の胎を通じて生まれてきた男性ではありませんか。

世界人類は、今でも民族差別、人種差別、国対国の対立などによって、あつてはならない残酷が続いています。そのどん底には男女差別によってうめき続けている無礼が



# ITSUKO OKABE

存在します。女性の心身の苦悩を察し、女性本来の直観・実践力を大切に、ともに歩もうとする男性こそありがたい人間仲間だと思います。

歴史的にも長い長い女性蔑視の先入観が尾を曳くのか、なかなか女性を対等の人間存在だと認め難い方もあるようです。どうか、刻々に積もってゆく既成観念を洗い流して、本来の美しく純粋な魂を磨きだして、ご自分を解放して下さい。

既著『水平へのおがれ』に私は「やつと書けた」という感じで、次の二、三行を綴っていました。

女として見下されてきた私は、男を見下す不幸からも解放されたい。人権として、自由として、個の存在を大切にしたい。

表現は簡単にはできません。真実、そう思わないと思っても行動もできないのです。

私は人間が「男女」存在である現実を、「不幸な内容」にしたくありません。

「女を見下す」のは、男の不幸。

「男を見下す」のは、女の不幸。

個人としても、組織体制としても、ひとりひとりが自分を人間らしく在らしめる喜びを高めてまいりましょう。

ありがとうございました。

## 岡部伊都子（おかべいこ）

一九二三年、大阪に生まれる。随筆家。

一九五四年から執筆生活に入る。伝統や美術、自然、歴史などにこまやかな視線を注ぎながら、戦争や沖縄、差別、環境などの問題を鋭く追求する執筆活動を続けている。

『岡部伊都子集』（全五巻、岩波書店、一九九六年）

『水平へのおがれ』（明石書店、一九九八年）

『京色のなかで』（藤原書店、二〇〇二年）  
など著書多数。

# 男女両性で形づくる 教団にむけて

座談会

—本廟奉仕・教師修練の現場から(上)—

出席 上杉彰子さん(教師修練スタッフ・小松教区)  
石川正穂さん(教師修練スタッフ・富山教区)  
伊藤敏暁さん(同朋会館教導・金沢教区)  
見義悦子(同朋会館教導・女性室スタッフ)  
司会 松本良平(女性室スタッフ)

私たちは「男女両性で形づくる教団」をめざして歩み出しました。ここ数年の教団の状況を振り返っても、主として男性の役割となっていた本廟奉仕・教師修練のスタッフ側に、少しずつ女性の参画がみられるようになってきました。

しかし、長い間培われてきた男性僧侶を中心とした教団の体質を変革することは容易なことではありません。〝人権の問題〟という視座を持って、より多くの女性たちの声が聞かれる教団の機構を構築していくことが望まれます。

そこで今回は、「男女両性で形づくる教団にむけて—本廟奉仕・教師修練の現場から—」と題して、教師修練スタッフや同朋会館教導・補導として関わっておられる方々による座談会を行いました。それぞれの場に女性スタッフが加わることによって何がどう変わってきたのか、あるいはどのような問題が見えてきたのかを話していただきました。

女性と男性がともに声を出し合うことの大切さと、「男女両性で形づくる教団」の実現に向けた取り組みの課題を明らかにしたいと願っています。

## 教師修練

真宗大谷派の僧侶の資格として「教師」があり、教師修練はその資格を取得する課程に位置づけられている研修のこと。前期、後期あわせて十四日間の期間中、修練生は京都真宗本廟(東本願寺)内の研修道場で、寢食をともにしながら宗祖親鸞聖人の教えに学ぶ。

## 教師修練での女性

—最初に、女性の教師修練スタッフとして感じられていることをお聞かせください。

上杉：私にとって、教師修練が人生の大きな転機になったんです。ある意味での私の誕生の時でした。その時をもらったから、修練の場が非常に恋しく、もう一度あの修練を受けたいという思いがずっとあったんですね。たまたま去年、かつての班担当の方から「修練スタッフにかかわったらどうか」と言われましてね、自分に果たして班担当という役割を担えるのかという思いが強かったんですが、押

し出されたような形で参加させていただいたんです。〝人として誕生し直す〟そんな場が修練かなと思っていますので、私は自分が受けた修練を再現したいという思いが強くなりますね。

スタッフとしての関わりは、私の場合これまでは三回とも男性スタッフの中に女性スタッフが一人という状況でしたが、特に違和感はありませんでした。昔からいる様な顔をして修練を楽しんでいました。

ただ、前回、女性の修練生の人数が男性を上回ってたんです。時代かなと思いました。その時は女性スタッフ一人で、スタッフとしての役割が果たせるのかということとは思いました。施設面では具体的な問題が出ていましたが、実はその時、一階のすべてのトイレが女性用に切りかえられまして、トイレで困っていたのは一階に部屋がある男性スタッフたちでした。

(女性修練生は所属する班の部屋とは別に一階に女性寝室が設けら





司会/松本良平

Ryohei  
Matsumoto



れています)

伊藤：実際、一九八五年に研修道場を建てた時点では、それだけ、女性が参加するということは眼中になかったんだと思いますね。

上杉：ただ、女性の修練生は女性寝室がある関係で、その期間に参加した女性どうしが班を超えて集まりますので、それぞれの班での取り組みが話し合えるというメリットもあります。非常に大事なことでだとは思いますが、そこでは、考えてもみなかった視座を与えられることがあるようで、そういう意味ではそんな場がある女性はラッキーだと思います。

見義：男性にもそういう場があったてしかるべきですね。

上杉：喫煙所がその場だったりしますね。修練では限られた日程の中で、全体でのフリー・トークンはほぼとれない状況がありますが、そういう時にいろいろ大切な問題が出てきているんですよ。

一方で、私の感覚から、女性スタッフとして、ということ、男

性スタッフの中に女性が一人、ということ、あまり意識してません。ともに求道者たらん、という感覚の方が強いからでしょうか。男性スタッフもそう思われているんじゃないでしょうか。

(現在は、禁煙と喫煙できる談話室が設けられています)

伊藤：そういう人はまれなんですよ。気が弱い人であつても、修練スタッフとして関わられるような状況になつていなければ問題だと思うんです。

上杉：確かに修練スタッフが本当に男女両性で共にという意識を持つて取り組むということがないと難しいだろうと思いますが、性に立つて考えるのではなくて、ともに求道者なんだというところに立脚地を持つことが大事だと思います。

—女性の修練生からは、女性スタッフがいって非常に助かっているというような声はでていますか。

石川：実際、担当する班の女性の

修練生の部屋に行かなければいけない時、女性スタッフにお任せするということはあります。

上杉：確かに女性の部屋に男性スタッフが入るのは難しいと思います。

伊藤：女性の修練生が増えてくる状況のなかで、これからはフリーの女性スタッフが必ず必要になってくるでしょうね。

### 女性スタッフの充実を

上杉：先回、他の班の女性修練生からも、女性スタッフの私に個人面談をしてほしいという要望が結構あったんです。担当の班の修練生だけで手いっぱいでしたので、それが終わってからならという形にしていたら、午前3時、4時まで待ってもらったけど結局終わらなかったということがありました。女性じゃないとわからない苦悩というか、男性に訴えても受けとめてもらえないような思いを抱えている修練生が多いんですね。

それぞれが持っている苦悩を自

Toshiake  
Ito



伊藤敏暁さん

分の背負うべきものとして立ち上がる時には、一旦その苦悩を受けとめてもらいたいという思いは当然あると思うんです。同性のスタッフにはそういう思いを話せるんですよ。ところが女性スタッフが少ないから時間的にも、内容的にも無理があるのが現状です。

**見義：**修練生にお寺の坊守さんが多かったりすると、実生活の中で女性として感じていることがいっぱいあるでしょうし、大学卒業前後というような人たちが多ければ、同じ女性であっても問題としていることが違うでしょうね。

**上杉：**特に、各地の真宗学院から参加される女性の修練生は、現にお寺の坊守さんであるとか、子育ての真っ最中であるとか、本当に生活そのものの中で生まれてきたような苦悩をいっぱい抱えていらっしゃると思います。逆に言えば、そういう環境が求道場へ押し出しているという気がするんですね。だから、女性スタッフでなければ受けとめきれないことはあると思う

んです。修練に参加する女性が増えてきている今、その思いに本気で向き合うのであれば、もう少し女性スタッフがいなければいけないと思うんですよ。

例えば、女性が坊守という立場を抱えながら、住職の理解を得て、一週間寺を空けて教師修練に京都まで出てくるというのは、本当に実現が難しいのですから。

**見義：**今、教団では寺における坊守の位置づけが問われていますが、本来、住職と坊守が本当に教団や寺について願いを共有していたら、住職が坊守を教師修練の場へ押し出したり、あるいは坊守自身が主体的に出て行くということがあると思うんです。

## 女性が参画してから

—男性スタッフとして感じられていること、気づかれたことは？

**石川：**教師修練では、テキストに『宗祖親鸞聖人』（真宗大谷派出

版部発行）を使っていますが、その中に「女犯偈（にょはんげ）」が出てくる箇所があるんです。私としては大乘仏教の一つの位置付けとして「女犯偈」を読むという理解をしているわけですが、私が「女犯偈」をそう読んでいることを女性はどう思っているのかということはあるんです。

女性の方が修練の場におられることで意識し、これでいいんだろうかと深められる。そういう意味で、男性だけで取り組んでいる時とは大きく違ってくると思いました。

もう一つは、声明の観点から、女性による調声の音程と装束の着付けに関する取り組みがありました。つまり、女性は通常、帯を腰より上の方に巻きますので腹式呼吸ができません。そこで、男性と同じように帯を腰骨の上あたりまで下げて結んで、胸には胸元が開かないようにリボンをつけるという工夫の仕方の提案が女性スタッフから出ているんです。

こういうことは、おそらく教団

## Etsuko Miyoshi



見義悦子さん

においても、論議されている場所が少ないと思うんです。声明の学習会は盛んですが、どちらかというと、口伝とか相伝という傾向にあるものを、両性に広げていく方向、共有していく方向が、修練における取り組みから出てきています。男性だけでは閉鎖性が見えないということでしょうか。実際に修練が女性スタッフによって随分変わってくるというを感じています。教師修練は、これからどういう教団をつくっていくかということと話し合う場所でもあるわけですから、そういう取り組みがあるということとは、ものすごく大きな意味があると思います。

—女性が参画することによって、これまで男性にとつて問題にもならなかったこと、あたりまえとしてやってきたことが、実は全くあたりまえではなかったということをはじめて見えてきますね。

伊藤：僕は、女性スタッフと一緒に

に修練にかかわったのは相当前ですが、それなりに緊張感がありました。女性スタッフがおられたこともあってか、女性の修練生が、実生活の中で性差別を受けた経験を問題提起してくださったことがありました。

見義：私自身が修練を受けた時には、女性スタッフは一人もおられませんでした。スタッフの話の表現や導入の仕方には、もし女の人がスタッフだったら、ちよつと違うんじゃないかなとモヤモヤとしたものを感じていました。

生活の中で教学が課題となるような聞き方をするには、男女両性で考え方を突き合わせてみるのが、非常に大事だと思うんですね。修練生との関係も、スタッフどうしの関係においても、そこにはじめて問題が見えてくるような気がしています。

### 男性は理性的？ 女性は感情的？

—奉仕団と修練生が同朋会館の食堂で一緒になったとき、奉仕団の方から女性の修練生に対して「あの女性は何をする人たちですか」という質問が出てくるんです。それほどまでに女性が教師資格を取るということは、まだほとんど認知されていない状況もありますね。男性は理性的で、女性は感情的ななどという捉え方もよく聞く意見ですけれど…？

上杉：教師修練という場では、生身と生身でぶつかるから、そのどちらが感情的とか、理性的かというような言葉で括することはできないですね。ある講師が話されたことで印象に残っているのが、親鸞聖人が比叡山をおりて六角堂にこもられた後、吉水教団へ行かれたのは、法然上人という人を求めて行かれたんじゃないかと、そこで開かれている人間関係、つまり御同朋御同行という存在を渴望されて行かれたのではないかと。

やはり、誰もが本当の友を渴望



Akiko  
Uesugi

上杉彰子さん

しながら生きているんじゃないでしょうか。日常の中では飾り立てたり、ごまかしたりしながらの関係しか結べない。あるいは、その関係すら崩れていて、気付いたら孤独になっている。現代においても御同朋御同行と表現されるような存在を、男とか女とか年齢とかを超えてみんなが渴望しているんだと思います。

### 自分たちはどんな教団を願っているのか

— 今後の修練で、考えていきたいことは？

石川：やはり、男性の中に女性が一、二人では、画一的な話にならざるを得ないようで、基本的にはスタッフとしても女性が多く参加できる修練になっていくことが望ましいと思います。

伊藤：そのためには、修練だけではなく、教団の状況全体が問題になってくるわけです。教団が、今

後どう男女両性で歩んでいけるかということが大きなテーマになってくると思います。

上杉：それから、修練には男性も女性もいろいろな理由で参加されるわけですが、スタッフとして関わっていると、お寺に帰ることを前提とせず、道を求めたいという思いだけで修練を終えられた人達は、その後どうなっていくのかということ 생각합니다。参加された人をすべて大事にしていきたいと思うのですが、実際、さまざまな苦悩を経て修練に来ることになって、彼ら、彼女らは、ここを出てどうするのだろうかということをいつも考えてしまいます。

そういう真宗大谷派教師の存在は、教団としては視座に入っていたでしょう。現状では、教師というイメージが非常に狭いイメージじゃないのではないかと思います。  
見義：そういう意味では、得度した人もすべて教団に関わっているかといえ、そうやってはいないのが現状でしょう。教団内の情報

にしても、お寺にいる人はまだしも、例えば、結婚して寺とは別の場所に住んでいるという人たちには情報が伝わっていないですからね。  
二〇〇〇年度末に教団の宗議会選挙における選挙権、被選挙権の拡大が話題になりましたが、「寺に責任を持っていない者が選挙に出てきたらどうするか」というような不安が先行するのか、教団の構成員という課題が、なかなか視野に入らなかったということがあります。

上杉：「両性で形づくる」と言っている教団の形、また、「法義相統、本廟護持」と言っている法義・本廟の形が私たちそれぞれにはあるわけで、ある形を守ろうとする者が、別の提起を排除してしまうという構造はどうしても生まれるでしょう。  
だからこそ、教団の形はどういうものなのか、自分たちはいかなる教団を願っているのか、なおかつどのような教団であることが願われているのか、ということを引きちっと問い直さなければいけないと



## Masaho Ishikawa



石川正穂さん

思うのです。

だいたい、現在この教団を支えているのは、七十代、八十代という年齢層だと思います。十年後に迎えるであろう宗祖の七百五十回御遠忌の頃は、誰がどういう形でこの教団を支えるのでしょうか。講組織が今も残る北陸の教区で、「宗門は発展するか、衰退するか」というようなアンケートの結果が、「発展する20%、衰退する60%、わからない20%」となったそうです。本当に、どこか制度の一部分を変えてみたところで、何にも変わらない現状だと思います。

伊藤：ただ、実際、「いかなる教団を願っているのか」といっても、具体的には、「一カ寺、一カ寺がどういう寺でありたいのか」という課題であって、その取り組みは坊守さんや住職、門徒さんの共同作業でしかないでしょうね。

### 意見を聞き合おう

上杉：もっといえば「僧侶とは」

「教師とは」ということが私たちに問われているのであって、依るべき教えが明らかになった、人に遇うことができた者として、身を置いたところでいのちを生きる上で何をなすべきなのか、何がなせるのかと問いつづけるしかないですね。

だから、両性で形づくるといっても、単に男女の人数やパーセンテージというようなことじゃない気がしますけどね。教師修練も男女がお互いの存在を尊重しあえるという場であればいいと思うんです。

伊藤：それはそうなんです、そのような問いの前に、教師修練が終わって、地元に戻って、さあ、発言しようとした時に、その発言が潰されていくという具体的な現状があるわけですから、その中でも、問題にしていきなさいと言われても、なかなかできない現状もあるかなと思うんです。

見義：住職が坊守に対して、研修会への出席ならいいけれど、得度は受けさせない、というような

ことが現実にはあるようですね。

上杉：なんで、そうなんでしょうね。住職の立場保持でしょうか。

見義：男女両性でということが願いとしてはありながら、世界的な規模で性差別はずうっと存在している。そのことに気付くきっかけは、差別を被っている人の声を聞くこととしかないと思います。まさに蓮如上人五百回御遠忌に掲げられたテーマ「差異（ちがひ）をみとめる世界の発見」なのですが、私たちの教団には今まで「両性で」という視点はほとんどなかったと思うんです。それは女の人にも言えることですが、今後は、今まで気付かなかった視点到気付け営みをしていく必要があつて、そういうことが女性室の願いでもあるのです。

正しいか正しくないかという判断よりも、まず、違う意見をいろんな場で聞き、あいあう練習を一つひとつ続けてやっていかなければならないと思うんですよ。

(つづく)



# 世界女性文化会議・京都 2001

Global Forum on Women's Culture Kyoto 2001

報告



2001年9月23日、国立京都国際会館を会場に、世界女性文化会議・京都2001が開催され、紫式部、清少納言ら多くの女性が活躍した平安時代の文化・経済を検証しながら男女共同参画の実践につなげようという試みが約400名の参加者を集めて行われ、女性室からもスタッフが参加した。

国連の協力団体「国際家族計画連盟」のインガー・ブリュッゲマン事務局長による基調講演の他「表現者としての女性」「男性の意識改革」など5分科会にわかれて報告や討論があった。

「新世紀、男女共同参画をめざして」と題したパネルディスカッションでは、男女ともに生きやすい社会の実現に向けて、政治の果たす役割、女性の課題などについて話し合われた。

衆議院議員の土井たか子さんから「国会など意思決定の場は本来、男女同比率であるべき」と指摘したうえで、「平和が基盤になれば人権は守られない」という提起があった。

参議院議員の小宮山洋子さんは「男の人が作った所に参加するのではなく、男女一緒に企画する時点から関わらなければ」と述べ、「オランダでは二人で働いて1.5の収入。午後5時には仕事を終わって一緒に夕食をとっている。女性にとっても男性にとっても人間らしく生きやすい社会にしていかなければ」と話した。

また、東洋英和女学院大学教授の進藤久美子さんは「政治が社会構造を変える。選挙制度を見直し、積極的措置を講じクオーター制（一定割合を女性に）を導入すべき」と強調した。

会議の最後には、アピール「千年の願い 千年の誓い」が参加者によって採択された。

また、協賛記念行事として10月7日には、左京区にある京都造形大学の「京都芸術劇場春秋座」を会場に、オペラ「阿国」が上演された。

出雲大社の巫女を名乗る阿国を主人公に、16世紀から17世紀への移行期、戦乱の後、町衆のエネルギーが盛り上がった京都の町を舞台としたもの。ジェンダー・フリーな阿国の歌舞伎踊りがもてはやされるなか、なお固定的なジェンダー観にとらわれていた周辺の人々との関係を乗り越えていく男と女のかたちが表現された。

10

## 教区の うごき

久留米教区に  
「男なり女なり委員会」  
ができるまで

坊守の問題を契機に派生してきた課題を教区で検討するため、一九九九年、組織拡充小委員会に「女性問題準備委員会」が設置され、話し合いがもたれました。

寺には男と女が存在するにもかかわらず、男性住職中心に運営されていて、そのことを自他ともに疑問にすら感じさせないのが現実で、寺にかかわる女たちの声なき声があったとしてもそれを受けとめていく場がありません。まして門徒にいたっては……

私たちはつねづね「御同朋御同行」といいながら、果たしてそのような関係を男と女が生きてきたでしょうか。その問題を語り合う場や、組織が是非とも教



## ＜アッピール「千年の願い 千年の誓い」＞

一千年前、日本の首都であったこの京都において、私たちは確かに、女性による文化が花開いたことを検証した。彼女らは、必ずしも社会的に恵まれた状況であったとはいえないが、文学に留まらず、労働、経済などに至る幅広い領域において、主役を演じる存在であった。このことは世界に類を見ない。にもかかわらず、その後、女性の力が凋落したのは、平和が崩れ、武力が社会を支配する中で、女性が意思決定機関に男性と共にのぞむ機会を持ち得なかったからである。

本日、地球上のさまざまな地域から集まった女性と男性の共同参画によって実現した、この世界女性文化会議・京都2001に参加した者は、新しい千年紀と新世紀を迎えるに当たり、下記のことを心から願い、心から誓う。

- 1 地球上各地の文化の相違点をわきまえながら、相互に理解しあう努力を怠らず、異なる文化を持つ地域間の紛争や戦争を、極力、回避しなければならない。
- 2 それぞれ地域の文化のアイデンティティを明確化しながら、地域を越えて共有し得る価値意識を形成しなければならない。
- 3 そのような価値意識の柱として、平和、男女の平等、環境保全の遵守に努めねばならない。

地球上に人類が出現してから、およそ五百万年になる。その長い年月に比べれば、私たちが今迎つつある新世紀は、ごく短い時間を指すに過ぎない。ところで、人類史上、前の世紀における人類の変化は多大であった。進化した大脳の機能の所産として、二十世紀において私たちは、かつてないような生活の快適さ便利さと寿命の伸長を享受するようになった。一方、二十世紀という時代には、かつてないような広範かつ熾烈な戦争が繰返され、人種や性別による抑圧が続いた。不幸にも今、新世紀を迎えたばかりの人類は、そのような前者の轍を踏みかねない状況にある。

私たちは今後、前の千年紀の替わり目に、この太平洋の西北に横たわる列島において、平和が続き、女性がおとしめられずに力を発揮した事実を鼓舞され、新しい千年紀の彼方に、この地球が存続し、その上において女性と男性が人間として尊重される社会を構築するよう、国や地方自治体及び各個人に至るまで、あらゆる方策をもって努力することを誓うものである。

2001年9月23日 世界女性文化会議・京都2001

参加者一同

区に必要であるという旨の答申が出されました。

組織拡充小委員会では、二〇〇〇年度「男なり女なり準備委員会」を設置して、引き続き協議を行っていくことになり、準備委員会においては、女性室公開講座の開催に協力しながら一年間にわたり方向性を模索し、協議を重ねてきました結果、組織拡充小委員会に答申が提出されました。

そして、教区会・教区門徒会にて規則や予算が承認され、今年度（二〇〇一年度）より「久留米教区男なり女なり委員会」が発足しました。

発足当初の委員は準備委員会の委員七名を含め十三名で、住職、坊主、門徒など様々な男性、女性に参加しています。今年度は「男女共同参画社会基本法」についての学習を予定しており、これから地道に歩んでいこうとしています。

独自の委員会ができるきっかけは、やはり寺における坊主の問題ではありましたが、準備委員会の人たちが、特に男性が自らの問題として受けとめ、かわったことが大きな要因だと思えます。



## お知らせ

### 『女性問題学習資料集3』 『女性問題学習資料集4』



第10号でもお知らせしました『女性問題学習資料集3』『女性問題学習資料集4』を発売しました。資料集3は、2000年度の女性室公開講座において女性史研究家の加納実紀代さんにお話いただいた全3回の講義を1冊にまとめました。

また、資料集4は同じく2000年度の女性室公開講座として開催した久留米会場での園田久子さん、宮城顕さんの講義、パネルディスカッションをまとめたものです。

いずれも無料で配布しておりますので、ご希望の方は女性室までお申し込みください。

また、資料集についてのご意見ご要望もお待ちしております。

### 女性室ポスター、リーフレット

私たちの宗門も、その制度のあり方や教えの内容をひとつひとつ問い返してみますと、やはり男性中心の歴史であったといわざるをえません。その現実のなかで、はたして男性と女性はほんとうに出会っているといえるのでしょうか? 「女らしさ」「男らしさ」という「ジェンダー（本来的ではなく、社会的・文化的につくられた固定的な役割分担としての性の違い）」に縛られるのではなく、女性であれ男性であれ、かけがえない一人の人間として、それぞれの個性を生かし認めあうことこそが、御同朋としての人間の交わりだと思います。

女性室ではこのような課題を多くの方々と共有したいという思いから、女性室ポスター、リーフレットを近日中に発行する予定です。

ポスターとリーフレットの表紙を同じデザインとし、あわせて活用していただければと準備をすすめています。「男女両性で形づくる教団」をめざす趣旨を宗門内外の多くの方々に伝えたいと思います。



## 報告

### 女性室公開講座 『永田萌さん講演会 & 音楽物語「世界中のひまわり姫へ」』



去る11月22日、真宗本廟視聴覚ホールにおいて女性室公開講座「女たちと男たちの寄り合い談義パート5」を開催しました。

今回は「私たちのこれから」をテーマとし、『永田萌さん講演会 & 音楽物語「世界中のひまわり姫へ」』を2部に分けて上演しました。

第1部ではピアノ演奏と朗読とスライドを同時に上演。第2部は永田萌さんのお話をおききました。

もともと、この「世界中のひまわり姫へ」とは、国際条約となっている「女性差別撤廃条約」をわかりやすくより多くの人に知ってもらうため、北九州市立女性センター“ムーブ”が名訳コンクールを実施し、優秀賞に選ばれた小笠原みどりさんの作品に永田さんが挿絵を描き、絵本として出版したものです。それをさらに朗読（栗原景子さん）、ピアノ演奏（藤崎由紀子さん）、画像により紹介するというのが「音楽物語」としての始まりでした。

永田さんは、まず主人公の「ひまわり姫」をどんな女の子にするのか、あるいは、一つひとつの場面のイメージをどんなふうにくらませ表現するのが、とても難しかったこと。そしてまた、ベトナムで出会った子どもたちの置かれている現状や生きていくことのたくましさ。さらに、日本の子どもたちの状況について、阪神大震災の時の子どもたちのはたらしを例にあげながら、「どんなに小さくても、人間というのは、誰かの役に立つという実感や自分の存在が誰かの幸せのもとになるということが、大きなよろこびではないか」と語られました。「子どもたちに手伝いをさせない社会というのは、一方で、子どもの権利を守っているようで、実はもっとも大切な喜びや幸せをとりあげていることになっている」と、今の日本の社会や家族の在りようと、未来へ伝えたいこと等、あふれる思いをお話してくださいました。



# ゆらぎ

## ～萌いずる魂～

石川純子

タミさんは六十五になるまで、掃除婦の仕事を続けた。辞めるとなったとき、さて、まとまったお金が入るが、最初に何をすべきか、しばし考えたという。その結果、<sup>ほころ</sup>祠を建てたというのだから、なんとも不思議だ。ところが当のタミさんは、そのわけをこんなふうにとらえて語る。

「わだし、祖母やんに、“タミや、お前、小っちゃいからわからないかも知れないが、大きくなるまでに感謝の心ってもの、なんとか身につくものだから、この家から出るときはそれだけは覚えて出ろよ。感謝の心というのを持てば、絶対にまちがいのない生き方をするのいいからな。感謝の心って、何よりの財産なんだよ。それさえ、胸におさえれば、お前、裸で出たって世の中怖くないぞ” って子守唄のように聞かされて育ったの。退職となったとき、この歳になるまで病気一つしないで生かされてきたと思ったら、そうだ、実家の祖母やんからいわれてきたの、おれが生きているうちに形にあらわさなくちゃなんねなーとなって、それが祠になったの。だからあれは、おれの感謝の心を形にただけなんだよ」。

タミさんの祖母やんとは、五十代で視力を失い、目が全く見えないまま八十九まで生きた人だという。「感謝の心」とは、仏のような心としかいいようがないが、失明という極限の苦しみと引きかえにつかんだ祖母やんの人生観であり、真理だったのだ。だからなんとしてでも孫に伝えておかねばと思ったのだろう。そしてその心をタミさんはしっかりと受けついだのだ。

木と花に囲まれたタミさんの祠は、いつ行ってもそこだけ街の喧騒<sup>けんそう</sup>から抜け出し、静謐<sup>せいひつ</sup>な空間をつくっている。目を閉じ手を合わせていると、夜ごと幼いタミさんに語り聞かせたという祖母やんの声が、私にも聞こえてくるような気がする。

(いしかわ じゅんこ・岩手県在住)

# 声

## [43歳の思春期]

お寺で懇親会付きの集まりはしょっちゅうですが、先日も組合がありました。その時、「片づけしないですみませんねえ。飲み会の後片づけが大変だから会場を受けないっていう坊守さんいますからね」なんて言われて、やっぱり男の人は、お茶出しや片づけを機嫌よくこなす坊守さんを求めているのかしらと思っていました。

私は準備と後片づけ専門の坊守さんじゃなくて、組合の構成員として、企画、運営に主体的に関わりたのですが、実現にはまだ時間がかかりそうです。坊守の条例の改正でも結局何も変わらないのかとがっかりしました。

でも今の時点で坊守が規約上どう規定されようと、寺にいて、真宗の教えを聞く私にとつての課題は、真宗の門徒になること、そして門徒の生活をしていくことだと思っています。

家の中にあつては、夫と子どもと義父とで御同朋の関係を生きること。もちろんそれは円満な家庭生活を目ざすものでも、私が良妻賢母になることでもありません。家の中で考え方の衝突があつたり、事件が起きたりして関係がぎくしゃくするのは当然です。その時に自分を正当化したり、開き直ったりせずに、凡夫という着地点に立ち帰れるかどうかが同朋の関係を開くかぎだと思えます。

できが良いとか悪いとか、役に立つとか立たないとか、そんなことばかりで、他人を評価する私のありさまを思い知らされた時、「どこに立っているのだ。浄土を立脚地と

して生きるんじゃないのか」という声が聞こえてきます。その時、「バラバラでいっしょ」の御同朋の世界がちよっと感じられる気がします。

私が家族を御同朋として尊敬できるならば、そしてそれがほんとうに「門徒」というのなら、思想信条の違う世の中の人とも、対立という形でなく人と人として、出会ってゆけるはずだ、と思っていました。

今の時代、地球環境のこと、原発のこと、差別や戦争のことも、このままじゃいけない、何とかしなくちゃと思うことばかりです。ましてや門徒として浄土を願う浄土を生きるってことは、自分ひとりでわかったような顔をして社会を冷やかにながめていることとは違うはず。「門徒なら声を上げよう。行動を起こそう」と声をかけてみましたが、共感してくれる人はいませんでした。それならと、寺と関係のない人の集まりで、門徒だ、真宗だと言いつくと、とたんに壁ができました。

私が門徒になることは、たとえ国や民族や思想信条が違っても、違いのままだに一緒に生きられるようになるはずと思っていたのに、孤立してしまう私は門徒とはいえません。どこで間違つたのか考えました。そして「門徒として」という言葉を他の人をまとめたり、自分と他の人を区別するために使うことが間違っているのだと思いました。「門徒として生きていくのか」とあくまでも自分に向かつて言う言葉だったようです。

門徒はこうあるべきということではなく、私が浄土を願って生きるということとは、常

に浄土に背いている私を知らされるということ。そして背いているからこそ、浄土という本来のいのちの世界にかなうような生き方をしようというあゆみがはじまる。でもそのあゆみは、傲慢になったり、排他的になったり、あっちこっちにぶつかる。そこでまた「おまえは真宗の門徒といえるのか」と問われ、「足をつけるところはこっちだぞ」とひっぱり返されて、またあゆみはじめる。でもまた道からそれてしまうのだけど、ひっぱり返してくれる人に会い、戻れる道があることがなによりうれしい。

そう思つてまわりを見れば、社会の困難な問題に対して、それこそ宗教や民族の違いにかかわらずなく、地道に取り組んでいらつしやるすばらしい人がたくさんいます。私はその人たちに、ただただ教えてもらうばかりなのでした。

私が真宗の門徒として生きていくことは、私の思いで暴走しては、ひっぱり返してくれる人と会い、その人を御同朋として見出していくことのようにです。

と、ここまで書いた文章を、中学三年の娘が読んで一言、「お母さん、思春期みたいだね」、思わず大笑です。とつてもほめてくれた言葉なのだそうです。でも私の思考の拙さも十分指摘していて、恥ずかしくて複雑な心境です。

でもいつまでも未熟であれという言葉もありますから、今の私には、びったりのような気もしています。

(山形教区 本多元子)

# 本の紹介

## 『大切なきみ』

マックス・ルケード著 いのちのことば社 フォレストブックス 1,600円(税別)

木彫りのウェミックたちのお話。エリという名の木工職人が彫った、一人ひとり姿の違うウェミックたちが、それぞれの思いで互いにシールをくっつけ合う。見ばえのいいもの、才能のあるものには金色シール。何をやってもだめなものには、ねずみ色のシール。たくさんねずみ色のシールを貼られてしまうパンチネロが主人公の絵本です。

## 『そのままのきみがすき』

マックス・ルケード著 いのちのことば社 フォレストブックス 1,600円(税別)

ルケードの絵本、第2弾。とある国の小さな村に住んでいる、親のいない5人兄弟がくりひろげるそれぞれの生き方。養子を望んだ王さまがもとめていたものは…。

愛されるのに資格はいらない。頑張りやさんにちょっと一呼吸、といったお話です。

## 『まつを<sup>おばあ</sup>嬸百歳を生きる力』

石川純子著 草思社 1,900円(税別)

まつを嬸はペスタロッチにあこがれ、貧しい農村の子供を救いたいという希望から人生をスタートし、理想農村の建設を説く青年と結ばれるが、待ち受けていたのは農家の嫁づとめという地獄だった。その体験は嬸を一農婦として大地に根付かせ、農村女性の地位の向上と生活改善運動に生涯を捧げることになった。著者である聞き手の石川純子は、嬸の実生活に裏打ちされた東北の農婦が持つ豊かな人間性—粘り強い精神、地についたものの考え方、土の香りのするユーモア溢れる感性—にぐんぐん引きつけられ、嬸の話を聞きに23年間通いつづけた。柔らかな岩手弁で東北の農婦の魂の伸びやかさ、やさしさが見事に捉えられている。



表紙の絵「未曾有のすれ」  
アーティスト:日比野克彦さん

1958年岐阜市生まれ。1982年東京芸術大学を卒業。その年、立体感のあるダンボールを用いた作品で第3回日本グラフィック展大賞を受賞し注目される。

今年のサッカーワールドカップの公式ポスターを制作するなど、日本のアートシーンを代表するアーティストとして、幅広い形態の作品を通して、常に時代と交信しながら進化し続ける表現世界を展開している。

現在、「日比野克彦展—ある時代の資料としての作品たち—」が開催されており、神戸市六甲アイランドの神戸ファッション美術館(終了)、新津市美術館(4月19日~6月30日)、徳山市美術館(7月12日~9月16日)、目黒区美術館(9月28日から1月15日)、宮崎県立美術館(11月23日~12月23日)を巡回予定。



## 『あいあう』とは…

この広報誌の名前である『あいあう』は、親鸞聖人によって書かれた『教行信証』（顕浄土真実教行証文類）「行巻」の「今みなまた会して、これ共にあい値えるなり」【真宗聖典159頁】という言葉から名づけられました。

「遭遇うこと難し」とか「遇いがたくして今遇うことを得たり」という言葉もありますが、いずれにしても出遇いのよろこびが表わされているのでしょう。

日々の生活にあって、わたしたちが“生きる”ということを考えたとき、それは、いろいろな人と声をかけあってこそ“生きる”ということがなりたっているといっても過言ではありません。しかし、時にその声が届かなかったり、行き違ったり、そのためにいろいろな出会いをしていながら、まわりの人を見失っているのではないのでしょうか。

いま、その出会いそのものに出遇いなおすことによって、自然に向きあうことのできるつながりを回復していきたい。『あいあう』という言葉にはそんな願いがこめられています。

あい、あう、女性室では活動を通してさまざまな出遇いを積み重ねていきたいと思います。

## 女性室活動報告

### <スタッフ派遣>

- 7月1日 北九州市立女性センタームーブ主催「ムーブフェスタ」参加
- 7月7日 高槻市・(財)高槻市文化振興事業団主催「女と男のつどい」参加
- 9月23日 日本ジェンダー学会主催「世界女性文化会議—京都2001—」参加
- 10月18日 日豊教区教化委員会主催「女性室との交流学習会」参加
- 12月10日 「真宗大谷派における女性差別を考えるおんなたちの会」との懇談会参加
- 12月11日 京都教区山城地区教化委員会主催「坊守制度研修会」参加
- 12月18日 三重教区中勢1組主催「坊守制度を考える集い」参加
- 12月21日 仙台教区教化委員会主催公開講座参加

### <2001年度女性室公開講座 女たちと男たちの寄り合い談義パート5>

テーマ：私たちのこれから

11月22日 京都会場第1回

永田萌さん講演会&音楽物語「世界中のひまわり姫へ」

会場：真宗本廟視聴覚ホール

1月29日 京都会場第2回

講師：森崎和江さん(作家) 宗正元さん(日豊教区阿弥陀寺住職)

会場：大谷婦人会館

## 編集後記

今号の表紙はアーティスト日比野克彦さんの作品「未曾有のずれ」（1996年）です。◆ずれ。人間関係にもよく使われる言葉ですが、あまり良いイメージを持って受けとめられる言葉ではありません。もともと、私と私以外のひととの間には、物事の考え方や受けとめ方などいろいろな面で“ずれ”があるのに、例えば、人間関係を保つためには、その“ずれ”を埋めようとしたり、結果、直面してくる“ずれ”の現実にも悩んだりもします。◆日比野さんは「美というのは、ズレ・スキマをとらえることなんですよ。ズレていること、人と違うこと…それが人間の人間たる部分です。みんなが違う意見や感情を持って、コミュニケーションしながら生きていく。それが美の一番基本的なところなのに、失われつつある。（中略）空気がなければ人間は死んでしまうのと同じように、「美がなければ人間は滅亡するぞ」。そのくらいの強烈な言い方を、美にかかわるクリエイターたちすべてが言っていかなければならないと思う。僕が展覧会をしたり、大学で教えるのも、それが言いたいためなんです。美というものを武器として、社会の中で貢献していく。それが僕の仕事だと思っているんです。」とコメントされています。◆“未曾有のずれ”という言葉は、「男女両性で形づくる教団」を目指している私たち女性室のあゆみにも課題を示してくれている気がします。最近、特にいろいろなことを話し合っ決めていくという時、一人ひとり“ずれ”ているんだという認識、大切な気がします。◆今回第11号より紙面を刷新しました。原稿や声をお寄せいただいた方々をせかしながら、当初の予定を大幅に遅れての発行となってしまいましたことをお詫び申し上げます。（鷹）

## 女性室広報誌『あいあう』第11号

発行 2002年3月1日

発行人 三浦 崇

発行所 真宗大谷派宗務所 組織部女性室

〒600-8505 京都市下京区烏丸通七条上ル常葉町

Tel 075-371-9187 Fax 075-371-9194

## お知らせ

本誌第10号に誤りがありました。

お詫びして訂正いたします。

P13 左段 3行目

誤「井本麟之」→ 正「井元麟之」